第60回イスパニア会例会講演要旨（令和4年12月11日）

近代バルセロナの芸術

―万博、ピカソ、貞奴

講師：木下 亮（1978年卒、昭和女子大学 特任教授）

カタルーニャ自治州の都バルセロナは、地中海に臨むコスモポリタンな港町であり、宮廷の置かれていたマドリードとは異なった芸術運動の展開がありました。私は2019年に開催された『奇蹟の芸術都市 バルセロナ展』（長崎県美術館他）を監修しましたが、その準備のため数年間にわたりカタルーニャの近代美術について調査し、現地の美術館館長や学芸員、研究者やコレクターと知り合う機会を得ました。本講演ではそのときの知見を基に、19世紀後半のバルセロナの発展を象徴する1888年の万国博覧会、パリで学んだバルセロナの画家たちによって開店したカフェ「四匹の猫」、そしてその常連だった若きピカソと彼の「青の時代」の作品について順に考察し、最後に1902年の川上音二郎一座のバルセロナ公演についても紹介します。

バルセロナ展（東京ステーションギャラリー、2020）チラシ

バルセロナといえば、まずアントニ・ガウディ（1852 - 1926）のサグラダ・ファミリア聖堂を思い浮かべますが、1883年にガウディが第二代建築家に就任してから始まったこの建設は、19世後半の都市計画のなかでみると、実は市の中心から離れた郊外でおこなわれていたことが分かります。土木技師のイルダフォンス・サルダー（1815 - 76）は、市壁に囲まれたバルセロナ市の急激な人口増加に対応すべく旧市街と周辺部の整備拡張計画を1859年に提出し、その後、撤去された市壁の外側には碁盤目状の拡張地域の建設が始まります。この時期のバルセロナの経済的発展を象徴するのが1888年に開催された万国博覧会であり、シウタデリャ公園がその主会場となりました。バルセロナはスペイン継承戦争（1700～14）でブルボン家出身の新国王フェリペ5世に反旗を翻したため、バルセロナ陥落（9月11日）後に市内監視を目的に要塞（シウタデリャ）が築かれますが、その要塞跡地に生まれたのがシウタデリャ公園でした。カフェ・レストランや凱旋門など万博に合わせて建設された建築物が、現在も公園の内外に遺されています。19世紀後半のパリやウィーンの万博と比べるとバルセロナ万博は規模の小さなものでしたが、それでもスペインで唯一開催されたこの万博に世界21か国が参加し、明治政府も起立工商会社を通じて工芸品などを出品しました。当時パリ留学中だった画家の久米桂一郎（1866 - 1934）は、母国の展示のため

に事務官として約1年バルセロナに滞在し、貴重な記録を残しています。この万博は、スペインにおけるジャポニスムの浸透の大きな契機だったといえるでしょう。

新市街の中心を貫くグラシア通りには、19世紀末から20世紀前半に意匠を凝らした住宅が建てられます。そのなかで際立っているのが「不和の街区」に並ぶ住居建築、つまりジュゼップ・プッチ・イ・カダファルク（1867 - 1956）の設計したカザ・アマリェー、リュイス・ドゥメナク・イ・ムンタネー（1849 - 1923）によるカザ・リェオー・ムレラ、そしてガウディが改築したカザ・バリョーといった新興ブルジョアジーたちの邸宅でした。しかし一方で富裕層と労働者との貧富の差はさらに広がり、過激なアナーキストたちによる爆弾テロが繰り返されました。多くの死傷者を出した1893年のリセウ劇場、さらに1896年の聖体祭行列への爆弾テロはそのよく知られた例であり、芸術家たちの作品のテーマにもなりました。

19世紀末のバルセロナのムダルニズマ（モデルニスモ）の美術運動を牽引したのも、ブルジョア出身の画家たちでした。サンティアゴ・ルシニョル（1861 - 1931）やラモン・カザス（1866 - 1932）はパリに憧れ、何年にもわたってモンマルトルに通います。またパリで学び、批評家として活躍することになる多才なミケル・ウトリリョ（1862 - 1934）は、ルノワールをはじめ多くの画家のためにモデルとなった美しきシュザンヌ・ヴァラドン（1865 - 1938）と知り合います。ウトリリョは後年ヴァラドンの息子を認知し、息子は父の名字をもらいモーリス・ユトリロ（1883 - 1955）と改名し、後に画家として活躍することになります。一方、ヴァラドンは作曲家のエリック・サティ（1866 - 1925）とも短期間ですが、恋愛関係にあったといわれています。ルシニョルは友人だったサティの姿を何点もの作品に描いています。

パリで学んだカタルーニャ出身の画家たちは、モンマルトルの芸術的な雰囲気をバルセロナに持ち帰ろうとしたのでしょう。ルシニョルはバルセロナ南の海辺の町シッジャスに住居兼アトリエである「カウ・ファラット（鉄の巣）」を構え、芸術家たちとの集いやコレクションの展示をおこない、新しい芸術を提案しました。また同地で5回にわたりムダルニズマ芸術祭を開催し、美術、音楽、オペラ、演劇が融合する「総合芸術」を仲間と創造し、またスペインにおけるエル・グレコ再評価のひとつの契機を作ったのでした。

続いて彼らは1897年6月にバルセロナ

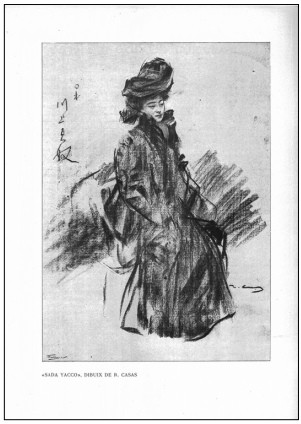
凱旋門

現在の「四匹の猫」

の旧市街にカフェ「四匹の猫」を開店します。同じくパリで学んだペラ・ルメウ（1862 - 1908）が店主を務め、ここはムダルニズマの芸術家とその支援者たちの溜り場となって、さまざまな活動がおこなわれました。展覧会、影絵芝居や人形劇、詩の朗読、またコンサートが広間で開かれ、アルベニスやグラナドスがピアノを演奏し、タレガがギターを奏でたことが知られています。またカザスやウトリリョが中心となって芸術雑誌『四匹の猫』と『ペル・イ・プロマ』が刊行されました。このカフェは6年にわたって営業しますが、まさにムダルニズマ芸術運動の発信地だったといえるでしょう。

この「四匹の猫」に通ってきた若者のひとりがピカソ（1881 - 1973）でした。マラガで生まれたピカソは、幼少のときから父に絵画を学び、一家がバルセロナに移ってからは大人に交じって公募展に出品するなど早熟ぶりを発揮し、さらにマドリードの美術学校に入学しましたが、やがてアカデミックな美術教育から離れバルセロナに戻ってきます。ピカソは「四匹の猫」において、パリで最新の芸術に触れた年長の画家たちから影響を受け、同世代の芸術家たちと親しく交わります。1900年2月にピカソの初個展が開かれたのも「四匹の猫」でした。さらにピカソは友人の画家カルラス・カザジェマス（1880 – 1901）と共に1900年にパリを訪れ、パリ万博を見物し新しい世界を体験します。しかしカサジェマスはパリでの失恋の痛手から立ち直ることができず、翌年パリで自殺し、ピカソはその死に強い衝撃を受けました。ここから「青の時代」が始まります。ピカソは社会のマージナルな存在である弱者たちを、貧しく不幸な人々の生きる様を、深いブルーの色調なかに描きだし、生と死に対する問いかけを真正面から続けました。

ピカソが交互にバルセロナとパリに滞在して自らの絵画を模索している頃、第二次ヨーロッパ巡業中だった貞奴（1871 – 1946）と川上音二郎（1864 - 1911）は、1902年5月にバルセロナのヌバタッツ劇場において3日間の公演をおこないます。カザスはこの機をとらえグラシア通りにあった豪華な自宅のアトリエで、貞奴と音二郎の椅子に腰かけた姿をそれぞれ素描に残しています。その対の肖像の複製は同月発刊の『ペル・イ・プロマ』に掲載されています。このときの新聞や雑誌に載った彼らの公演についての批評を調査してみますと、貞奴はすでにヨーロッパで知名度の高い「女優」であったことが分かりますが、一方でその舞台の評価は、言葉の壁があったせいか、さまざまなものがありました。「バルセロナ展」ではこの夫婦の肖像を並べて展示することが見どころのひとつだと考えていましたが、この2点を所蔵するバルセロナの美術館がその望みを十分理解してくれたことは、スペイン美術研究に携わっている者としていちばんの喜びでした。



カザス《貞奴》『ペル・イ・プロマ』88号、1902年5月、p.270